

## 【 現 地 日 程 （ 2 8 年 度 ） 】

月日	曜日	時間	内容
8月16日	火	5:30	太田市出発
		10:45	成田空港出発（NH012便）（日本時間）
		8:25	シカゴ・オヘア空港到着（シカゴ時間）
		14:00	ホストファミリーと対面（ラフィエット時間）
8月17日	水	8:15	コロンビア動物園
		10:00	Tony Roswarski ラフィエット市長表敬訪問
		12:00	昼食
		14:00	John Dennis 西ラフィエット市長表敬訪問
		14:30	警察署見学
		17:00	ホストファミリーお迎え
8月18日	木	8:15	David Byers ティピカヌー郡長他表敬訪問
		10:00	パデュー空港管制塔見学
		11:30	昼食
		13:00	スバル・インディアナ・オートモーティブ（SIA）見学
		15:00	自由行動
		16:30	ティピカヌー郡立図書館見学
		17:00	ホストファミリーお迎え
8月19日	金	9:00	フェアオックス農場体験
		17:00	ホストファミリーお迎え
8月20日	土		ファミリーデー
8月21日	日		ファミリーデー
8月22日	月	7:15	Tecumseh Jr. High School/Jefferson High School 体験入学
		15:15	ホストファミリーお迎え
8月23日	火	8:00	Tecumseh Jr. High School/Jefferson High School 体験入学
		15:15	ホストファミリーお迎え
8月24日	水	7:15	Tecumseh Jr. High School/Jefferson High School 体験入学
		15:15	ホストファミリーお迎え
		18:30	さよならパーティー
8月25日	木	6:00	ラフィエットを出発（ラフィエット時間）
		10:55	シカゴ・オヘア空港出発（シカゴ時間）
8月26日	金	13:55	成田着（NH011便）（日本時間）
		19:00	太田市役所到着

## 団長

8月16日。姉妹都市である、米国・インディアナ州にあるグレイターラフィエットへ出発する日がとうとうやってきた。6月18日の顔合わせから約2か月間、この事業へ積み上げてきた想いを胸に私たちは太田市役所から成田空港へ向かった。本市とグレイターラフィエットは30年近く交流が続いており、この交換学生派遣事業も今年度で9回目を迎える。先輩方が築いてくださったバトンを更に次へと繋いでいく使命に、身が引き締まる思いだ。今回参加した生徒たちの多くにとって、今回が初めての海外であり、初めてのホームステイ体験。行きのバスでの彼女たちはいつもとは様子が違い、不安・緊張感・昂揚感など様々な気持ちが入り混じっているのが伝わってくる。そんな感情の渦に巻き込まれながら、あっという間に成田に到着し、交流推進課職員に見送られて搭乗を迎えた。

今回、この事業への応募理由について「人生の糧となる経験がしたい」と答えてくれた生徒がいた。「英語は苦手だけど、苦手だからこそ頑張りたい」と。彼女だけではない。全員が「選ばれた」ことへの誇りと大きな目標を持って参加してくれている。その思いをしっかりとサポートできるようにと気を引き締め、出発した。約13時間のフライトを経て、私たちはイリノイ州シカゴの郊外に位置するオヘア空港に到着し、最難関門である入国審査を迎えた。容赦ないスピードで飛んでくる英語の質問の数々に心を折られかけた学生が多かったようだが、何とか全員突破し、夢にまで見た米国へ入国することができた。そこからラフィエットまでは更にバスで3時間。太田を出発してから約20時間後、ようやくホストファミリーとの感動の対面を果たし、各家庭へ向かう。現地にてまず実感することは日本人が全くいないということ。ラフィエット市には富士重工の現地子会社であるSIAが、西ラフィエット市には世界中から学生が集まる総合大学・パデュー大学がそれぞれあるが、日本人の数は決して多くない。希少性の高い存在であるが故に、一人ひとりの行動がまるで日本人全体を表すかのような、緊張感に近い不思議な感覚が生まれる。きっとこれが自分の中の「日本人」という自覚なのだろう。到着した翌朝、ティピカヌー郡が運営するコロンビアン・パーク動物園を訪問した。ここでは地元のテレビ局が「姉妹都市の日本人がわが市を訪問中！」といった内容で取材に来ており、交換学生団12名の様子が撮影され、このときの内容は翌朝のニュースで放送された。信じられないと思うが、その映像を見た方々が街で私たちを見かけると“**Aren't you the group of students from Ota? Welcome!!!**（もしかしてあなたたちが、太田から来ている学生さんたち？ようこそ！）”と歓迎の意を直接示してくださるという出来事が何回もあり、とても温かい気持ちにさせられた。「日本人」として受け入れてもらえているという実感はもちろん、太田市という場所を知ってくださっているということも大変嬉しかった。また、ラフィエット・西ラフィエット双方の市長を表敬訪問した際は、忙しい公務中であるにも関わらず私たちのために時間を設け、生徒一人ひとりの今回の訪問に対する思いを込めたスピーチに耳を傾けてくださった。どちらの市長も「太田市とこうして友好関係を保ち続けていることを嬉しく思う。この度は遠いところ、来てくれて本当にありがとう」と熱い握手を交わしてくれた。3年後のラグビーワールドカップや、4年後の東京オリンピックと、これから太田市やその近辺の自治体には世界中から訪問者が訪れるだろう。そんなときに今回体験した「相手を受け入れ、歓迎する姿勢」を積極的に示していきたいし、生徒たちにもこの感動をいつまでも忘れないでいて欲しいと思った。

滞在中は、引率者の私たちもホストファミリーのご家庭でお世話になった。陽気な元外科医のジャックさんと、いつも優しい元教師のリタさんご夫妻。とても裕福なご家庭で、80近いご高齢にも関わらず、数多くの社会奉仕活動にも積極的に携わっておられる。リタさんはいつも言っ

ていた。幸せは独り占めにするものではないのよ、と。

ご夫妻が携わるボランティアの中に **CASA** という活動がある。これは、**Court Appointed Special Advocates** の頭文字を並べた名称であり、少年裁判所又は家庭裁判所の裁判官によって、児童虐待事件の裁判を経験せざるを得なくなった児童の利益の代弁者に任命された市民ボランティアを指す。**CASA** の役割は、裁判所の目と耳となり、裁判過程において児童の利益が看過されないよう、またできるだけ早く安全な家庭が児童にあたえられるよう、児童の境遇を調査し、事件を監視することである。悲しいことに、グレイターラファイエット内の地域間における貧困差はかなり激しく、大学関係者が多く住む裕福な西側に比べ、貧困層が多く暮らす東側では児童虐待も珍しいケースではないという。リタさんも年間に数回案件を担当し、今まで何十人もの子供を見届けてきたそうだ。行政だけの力では到底解決できない問題だからこそ、地域が一体となり、こういった活動に励んでいる。そして、その根底にあるのは、地元への愛だという。“**We all want to make Greater Lafayette, greater!**”（皆がグレイターラファイエットを、より住みよい街にしたいんだよ）とジャックさんは冗談を交えながら話してくれた。人を動かす程の地域に対する愛情の力強さに、心から感銘を受けた。

また、アメリカ社会を実際に肌で感じる事ができた生徒たちは、初日からは想像できないほどの成長を遂げていた。異文化の中で日本人としてのアイデンティティを再確認し、アメリカに一方向的に憧れを抱くだけの段階から、現地の人に日本の魅力を伝えたいと思えるところまで成長してくれたことに感動した。日常の様々な場面で文化や価値観の違いを痛感することがあったとは思いますが、多様性を受け入れることの大切さを身を持って経験できたことは、きっと彼らの人生の糧になると思う。「この11日間を体験してどうだった？」という質問に「世界に目を向けるきっかけとなった」と答えてくれた生徒がいた。彼女たちには是非とも、海の外に羽ばたいて欲しい。そして、パワーアップして太田市に戻ってきてくれたら、と思う。

最後に、今回の派遣事業にあたり、手厚くサポートしてくださった太田市国際交流協会の職員の方々、現地で私たちの安全を一番に考え、常に行動を共にしてくださった **Greater Lafayette Commerce** スタッフの方々、受け入れをしてくださったホストファミリー各位、同じ引率者として苦楽を共にしてくださった小野里先生、快く送り出してくださった企画政策課の方々。これらの多くの関係者の皆さまにお力添えいただき、今回の派遣事業を無事に終え、14名揃って帰国することができました。このような素晴らしい機会をいただきましたことを心から感謝いたします。

## 副団長

「成長」と「人とのつながりの大切さ」、海外交流事業を通して、この2つの言葉が心に強く焼きついている。私たち14名は、様々な経験や試練を乗り越え、多くの出会いをする中で、かけがえのない貴重な時間を過ごすことができた。

私たちが最初にむかえた試練は、入国審査であった。特に、これまで海外への渡航経験がほとんど無い生徒たちにとっては、ナチュラルな速度で話される英語に初めて触れる機会であった。多くの生徒は、入国審査を前に、「自分の英語が通じるのか」「間違えたらどうしよう」といった緊張や不安を抱えている様子であった。

その後も、まだ見ぬホストファミリーや姉妹都市委員会の方々との出会い、市長への表敬訪問、警察署や裁判所、コロンビア動物園、SIA、牧場などでの体験など過密なスケジュールをこなし

ていった。その中で、日本とは異なる市や郡の仕組み、法律、文化、町並み、食事などに直に触れ、多くの経験や知識を得た。慣れない環境での体験や初めて出会う人との英語でのコミュニケーションは決して楽なことばかりではなかったが、私たちの考え方や視野を大きく広げる貴重な体験となった。

現地の学校への体験入学では、日本の学校との違いに驚きの連続であった。授業開始と終了の際のあいさつがないこと、一人一人に支給されたノートパソコンを活用しての授業、給食で食べた昼食など、日本との様々な違いを体験することができた。また、生徒一人一人に現地の学校の生徒がパートナーとしてつき、丁寧に学校の案内をしたり、分からない点を笑顔で教えてくれたりしていた。3日間という短い期間であったが、生徒は積極的にコミュニケーションを図り、パートナーとの友情を深めている様子が見られた。

このような経験をする中で、なによりも感じたことは、現地で出会った人たちの温かい「おもてなしの心」であった。私たちを本当の家族の一員のように受け入れてくれたホストファミリー。様々な体験を私たちが安全に、楽しく取り組めるように、色々な気遣いや支援をしてくださった姉妹都市委員会のジョディさんとキムさん。私たちの訪問を快く受け入れてくださった、市長をはじめとする訪問先の方々。たくさんの方々のおもてなしに触れ、感謝の気持ちでいっぱいになった。

そして、最終日のさよならパーティーは、私たちにとって忘れられない思い出になった。どの生徒も、自分のホストファミリーのもとに集まり、別れを惜しみながらも最後の家族での会話を楽しんでた。ホストファミリーやジョディさん、キムさんへ向けたスピーチでは、どの生徒も堂々と素直な感謝の気持ちを伝え、初めてアメリカに来たときと比べ、見違えるほどの「成長」を見せてくれた。余興として発表の準備をしてきた *Sukiyaki* の合唱とソーラン節の演技の際には、これまでの事前研修会で仲間とともに練習を重ねた日々や、ラフィエットで過ごした日々を思い起こさずにはいられず、とても感動的な時間であった。ホストファミリーやジョディさん、キムさん、そして14名の間に生まれた絆に、「人とのつながりの大切さ」を強く感じる事ができた。

教員としてもこの交流事業は非常に有意義であった。東京オリンピックの開催や加速する国際化の中で、私たちは、英語でコミュニケーションを図る力をより求められることになる。そんな状況の中、英語を使って意思の疎通が図れる生徒の育成が、英語教員に求められている使命だと、再確認することができた。そのためにも、日頃の授業改善を行ない、生徒の実践的な英語力をより高められるよう、精進していくことを決心した。

最後に、常に良きリーダーとして団を率いるとともに、苦楽を共有することができた団長、高い目標と意欲を持って何事にも真剣に取り組んだ12名の団員、このような機会を与えてくださった太田市長や国際交流協会の方々、応援してくださった職場の先生方に心から感謝の意を表したい。

## 藪塚本町中学校 女子 2年 アメリカで得たもの

「What do you think color of the sun?」私はこの言葉が自分の視野を広げてくれたんだと思います。

私はアメリカの中学校で「太陽って何色だと思う?」と聞いてみました。当然、私は赤と答えてくると思っていましたが、彼女は「白」と答えました。そのことに驚いた私は「なぜそう思う

の？」と聞いてみると、「なぜなら、白に見えるから」と教えてくれました。見てみると、確かに白くは見えましたが日本人なら赤やオレンジを想像すると思います。この時、私は固定観念にとらわれず相手の意見を聞くことの大切さを学びました。相手の意見も取り入れることで、自分の視野を広げることができるのだなと。

次に感じたことは、アメリカ人の心の広さです。日本なら、スーパーマーケットなどで他人と目が合っても声などかけてもらえませんが、アメリカだと「どこから来たの？」とか「アメリカへようこそ」などと言ってもらえます。また、「心配をかけてすみません」と言うと「無事だったんだから、謝るんじゃなくて喜ばなくちゃ」となぐさめてくれたりもしました。どうしてアメリカ人はこんなにも心が広いのだろうか思い、聞いてみると「人にもよるけれど、宗教が関係あると思うの」と返してくれました。日本ではあまり宗教は気にしたことがありませんが、アメリカでは宗教は人々の生活に根深く関係しています。私たちもファミリーデーに教会に連れてってもらいましたが、そこでは大勢の人が一つになってみんなと同じことをしていました。それは、同じ宗派の人はみんな仲間とでも思っているかのようでした。そして、彼女は「アメリカ人は神のおかげで生きていると思っている。どの宗教にも関係なく。だから、神のように人の心の支えになりたいと思っているのだと思う。」と教えてくれました。日本でも、人に優しくすることや助け合うことの大切さは教えられています。宗教の有無に関わらず、人に優しくすることはどの国でも教えられているのだなと思いました。

私はアメリカに行って、たくさんの事を学びました。視野が広がったり、人に優しくすることの意味を改めて感じたり、そして、英語の楽しさも学ぶことができました。互いに文化や言葉が違っていても、人に対する優しい心は共通だということを実感しました。

この経験を生かして将来は母校である藪塚本町中学校の英語の先生になりたいです。このアメリカ留学で得た英語の楽しさをもっとたくさんの人に教えたいです。本当にこの経験は自分の将来の道を切り開くきっかけとなりました。今回学んだことを日本でも役立てていきたいです。

## 太田中学校 女子 1年 ラファイエットでの貴重な体験

私にとって13人のメンバーと一緒に過ごした11日間は、掛け替えのない一生の思い出になりました。

この旅の始まりは、8月16日早朝。家族に見送られ、私達の乗ったバスは成田空港を目指しました。この時の心境は、楽しみという感情が7・8割、残りは緊張や不安でした。しかし、その緊張や不安はしだいに消えていきました。

12時間の長いフライトを終え、アメリカ合衆国にやってきました。辺りを見渡すと聞こえてくるのは英語、目に入ってくるのも、もちろん英語でした。本当に来たんだなと思いました。空港から3時間ほどの場所にインディアナ州、ラファイエットがあります。そこを目指して、待機していたバスに乗りました。時間がとても長く感じられました。

ラファイエットの図書館。ここで、ホストファミリーと対面しました。この時、きっとあの人がホストファミリーだろうと直感しました。直感は当たっていて、今思えばなぜそう思ったのだろうと不思議に思います。図書館に来ていたのは、ホストマザーでした。

ホームステイでまず最初にやったのは、ホストマザーとマフィン作りでした。かぼちゃと、チョコチップが沢山入った、パンプキンチョコチップマフィンを作りました。カップに生地を流し込んでいる途中、砂糖を入れ忘れたことに気付き、もう一度砂糖を加えてやり直し。手間がかか

ったものの、完成したマフィンはずごくおいしかったです。お互い、一気に緊張がほぐれ、仲良くなれました。

2日目から4日目は、動物園や牧場に行ったり、市長さんにお会いしたりなど、さまざまな事をしました。その中でも印象に残っているのが、スバルの工場見学です。小学生のころ見学に行った太田の矢島工場に似ているところが数多くありました。

ファミリーデーは、ショッピングモールに行ったり、ボードゲームをしたり、犬と遊んだりして、ホストファミリーと楽しい時を過ごしました。

最後の3日間はミドルスクール（中学校）に行きました。初日、授業の終わる頃には、何人かの生徒さんと仲良くなれました。2日目からは、日本にすごく興味があるみたいでいろいろなことを質問したくて話かけてくれた人もいました。先生もすごく優しく、美術の先生は、着物を着た女性が描かれた缶を見せてくれました。パソコンを使った事業で、授業中お菓子を食べている人がけっこういたので、自由なところが日本とは違うんだなと思い、驚きました。沢山の人が手を上げ、積極的に授業に参加していたので、私達もこのようなクラス、学校を目指すことも必要なんだなと考えさせられました。

ラフィエットで過ごした10日間、貴重な体験を沢山することができて本当に良かったし、自分の英語力を試すこともできて、とても満足しています。10日間という長いようで短かった日々の思い出は、今でも何度もよみがえってきます。この貴重な体験で学んだこと、思ったこと、考えたことをこれからの生活に生かしていきたいと強く思っています。

最後に、この交換学生派遣事業に私を参加させて下さり、協力して下さいました多くの方々に、感謝します。ありがとうございました。

### 南中学校 男子 3年

この間、学校のALTの先生に、「アメリカはどうだった？」と質問されました。僕はあまり深く考えずに答えたのですが、先生はちょっと驚いた顔で、「わあ、英語すごくよくなったね。」と言ってくれました。僕の体はうれしさでカアッとあつくなりました。自分の中でラフィエットでのあの10日間が生きているように感じました。せっかくほめてもらったのに何も考えられなくて、「サンキュー、サンキュー」としか言えませんでした。ラフィエットに行くことが出来たのは僕にとって本当に素敵な体験になりました。しかし、帰国してから僕はずっと、日々の生活の中であの体験を何に生かせばいいのかを考えていました。でも僕には、それがわかりませんでした。逆に、ラフィエットでの思い出はだんだんうすれていってしまうのではないかという気もしました。けれど先生にほめてもらったとき、頭の中をラフィエットでのいろいろな記憶が駆け巡りました。いろいろな思い出が頭にありありと思い浮かびました。ああ、ちゃんとここにあって、と僕は思いました。

僕の思い出すラフィエットでの思い出はあたたかいものばかりです。ラフィエットで多くの人に会いました。少ししか関われなかった人、たくさんお世話になった人などいますが、僕が出会った人は全員がとても心のあたたかい人たちでした。彼らが僕のラフィエットでの生活をあたたかくしてくれたのです。僕が出発前に想像していたさびしい思いなどは一度もしませんでした。感謝の気持ちでいっぱいです。

やはり、いちばん感謝の気持ちを伝えたいのは僕のホストファミリーです。初めてホストファミリーのお家に入り、ScottがJillやMiriam、Eliを紹介してくれたとき、家の案内をしてく

れたときのあのドキドキした感じは今でも忘れられません。僕は最初の2、3日、アメリカの人の言っていることはほとんど聞き取れなかったし、自分の言いたいことも上手く伝えられませんでした。けれど、僕がファミリーのみんなの言っていることがわからずに、何度聞き返しても、様々な工夫をしながら僕にわかりやすくなるように話してくれました。また、僕の言っていることが伝わらなくても、僕の言いたいことを推測して、「～ってこと？」などときいてきてくれました。僕はそれだけですごく話しやすくなりました。ファミリーからの質問に答えられたり、自分の言いたいことが伝えられて、会話が成立したときには、とてもうれしかったし、心が晴れたような気分になりました。川にカヤックに乗り連れて行ってもらったことはとてもいい思い出です。僕はカヤックに乗るのが初めてでした。大自然の中を Miriam と Eli と競うように漕いでいくのがとても気持ちよかったのをよく覚えています。Scott が僕のために汗を流して豆腐を探してくれたこと、みんなでバスケットボールやミニチュア・ゴルフをしたことも印象に残っています。僕のホストファミリーは僕にすごくいい体験をさせてくれたし、いい思い出をつくってくれました。いろいろなどころで、ファミリーからの歓迎の気持ちみたいなものがすごく伝わってきて、このファミリーに出会えてよかった！と何度も思いました。

その他にもいろいろな人にお世話になりました。キムさんとジョディーさん、2人は Scott と同じ会社で働いていたので、Scott の忙しいときにはいろんなところに連れて行ってくれました。学校の人々も大好きです。みんなに「ソウ、ソウ」と呼んでもらったことが、本当にうれしかったです。

10日間暮らして僕はラファイエットという街が大好きになりました。

## 城東中学校 女子 3年

私は、この大切な中学3年生という時期に「留学」という大きな経験をさせていただき、感謝しています。アメリカでの10日間は、今までの中で最も濃い10日間になりました。そして、この10日間でたくさんのことを学び、経験しました。

私は、今回が初めての飛行機で不安と緊張に襲われていました。ですが、5回の研修会を通して仲良くなった仲間と一緒にだったので、安心しました。現地に到着し、最初に英語力を試されるのが「入国審査」でした。これは、10日間で一番怖かったです。アメリカでの初めての食事はマックでした。初めて英語で注文したら、少々違うものがきました。また、サイズがとにかく大きかったです。日本にはないサイズがあり驚きました。2～3時間ぐらいバスに乗り、降りるとホストファミリーが迎えに来ていて、想像していたよりも優しく、親切で、いい家族でした。家は大きく、庭と森があり日本とはスケールが違いました。

2日目には、ラファイエット・西ラファイエットの市長さんにお会いしました。お二人とも優しい方でした。警察では、みんなに手錠をかけてくれたり、バイクやパトカーに乗せてくれました。モールに行くと、やはり何もかもが大きく、量もあり、その大きさに圧倒されました。ホストファミリーの通う高校にも連れていってくれました。アメリカの映画やドラマに出てくるロッカーや教室を見て「アメリカにいるんだ」と改めて感じました。

3日目には、市議会に行き3人の方からお話を伺いました。そこで「おおたん」のぬいぐるみをだしてきてくれて、「姉妹都市」ということを感じました。裁判所にも案内してくれました。また、パデュー大学はとても広く、大きかったです。大きな門を通り抜けたとき、なぜだかすごく興奮しました。お昼に「ルートビア」を飲ませてもらいました。漢方の味がすると聞いていた

ので、覚悟はしていたのですが、私の口には合いませんでした。でも、日本では飲んだことのない味だったので、アメリカで飲めてよかったです。

ファミリーデーの2日間では、本当に貴重な体験をしました。1日目は、「NFL（アメリカンフットボール）」の会場に連れていってくれました。会場は想像以上に大きくて驚きました。点数が少しでも入ると、観客の人がみんなお祭りのように騒ぐのですが、日本とはまた違うな、と思いました。また、会場に向かう途中、あいにくの雨だったのですが、その後晴れて、虹を見ることができました。日本で見ても、アメリカで見ても、虹はきれいで特別なものでした。2日目は日曜日だったので、教会に行きました。日本は宗教にそこまでこだわっていない(?)ので、新鮮でした。キリスト教では歌をたくさん歌い、みんなで同じことをするので、教会にいた時間は私にとって色々と考えさせられました。日本ではなかなかできない体験でした。

8～10日目は、学校でした。アメリカの学校も大きくて、比べものになりませんでした。授業の開始・終了後のあいさつがなく、変な感じでした。あいさつは大切だと改めて感じました。授業はパソコンを使うので、私もこういう授業をしたいと思いました。

10日目のさよならパーティーでは、ソーラン節と歌をみんなで披露でき、そして感謝の言葉を伝えられたのでよかったです。

私は、アメリカに留学しここには書ききれないほどのことを経験しました。そして、これを励みに英語をもっと学習し、ホストファミリーに会いに行きたいです。また、企画をしてくれた方、連れて行ってくれた職員の方、両親に感謝しています。ありがとうございました。この10日間の出来事は、生涯決して忘れません。本当にありがとうございました。

### 休泊中学校 女子 3年 交換学生派遣事業を終えて

最初に、多数の応募者の中から太田市の代表として選んでいただき、この交換学生派遣事業に参加という素晴らしい機会を得ることができたことに感謝します。

私はこの事業に参加して、日本とアメリカのそれぞれの良いところを見つけることができたと思います。なぜなら、私はこの事業に応募したとき、アメリカに対してあまり良くない印象を持っていたからです。しかし、実際にアメリカで出会った方々は親切な人達ばかりで、良い意味で期待を裏切られました。派遣から早一ヶ月が過ぎた今も、お世話になった人々やアメリカで見た広大な景色を忘れることはありません。

特に印象に残っているのは、現地の学校で出会った人々やスクールバディです。私は十五歳ということで高校へ行くことになったのですが、日頃よく見ている海外のTVドラマそのまま、とても興奮してしまいました。私のスクールバディのエミリーは日本語を専攻していたため、日本語がとても上手でした。初めて会ったときも日本語で自己紹介をしていたので驚きました。彼女は日本にとっても関心があったので、たくさんの日本文化を紹介しました。日本の学校のこと、家族のこと、アメリカと日本との違いに驚いたことなど、様々です。どの話にも興味を持ってくれて、異文化交流の楽しさを実感しました。その上、彼女と彼女の友達に、私が昔から習っている習字を筆ペンで書いて見せると、とても感動してくれました。その時何とも言えない嬉しさが込み上げ、日本文化の素晴らしさを身にしみて感じました。そして、授業の始めに挨拶がないこと、先生が話をしている時にお菓子を食べていることなどは、文化の違いを体感しながらも日本の「礼儀」を誇りに持つ出来事でした。さらに、授業で担当になった政治の先生とたくさん話すことができ、先生は日本語が全く使えない中で自分の知っている表現をできる限り使いました。

先生は容赦なく難しく速い英語で話しかけてくるのに対し、何となく会話ができるようになった自分に、語彙力の成長を感じました。

次に、私の第二の家族になったホストファミリーです。チャーミングなお母さん、笑顔のお父さん、そして姉のような存在になった二人の娘さん。緊張でいっぱいだった初日から毎日出迎えてくれた二匹の大型犬のことも忘れられません。一番の話し相手だった娘さん達とは、毎晩話に夢中になり夜中まで色々な話をしました。娘さんのうちの一人は、昨年交換学生として太田市を訪れていて、日本に関する本や日用品が部屋に置いてあり驚きました。娘さん達とは女の子らしい会話が弾みました。メイクの話や好きな歌手の話、さらに、恋愛の話まで話題が尽きることはありませんでした。平日の午後は、アメリカの女の子が行くお店に連れて行ってきて、毎日がとても楽しく充実していました。ファミリーデーにはショッピングモールや動物園に行き、日本にはない広さ、物価の安さなどを感じました。滞在中、私は自分の携帯端末を紛失してしまいました。家族総動員で探してようやく見つかったのですが、私が謝ると、「何で謝るの。見つかったのだから喜ぶべきよ。」とお母さんが笑顔で言うてくれました。それを聞いて私は、感謝と申し訳ない気持ちでいっぱいになり、日本人にはないアメリカ人のポジティブさが感じられました。それから、家の庭でマシュマロを焼いて食べたのも楽しい思い出です。アメリカのマシュマロはとても甘くて、アメリカの人達はすごく甘いものが好きなのが分かりました。ホストファミリーとは、今でも SNS を使って毎日のように連絡を取り合っています。こんな素敵なお家族と出会えたことを誇りに思います。私は、この経験を通してアメリカに対する考え方が、大きく変わりました。私にとってアメリカは「家族のいる温かい国」です。私自身のアメリカへの意識が変わったことで、国際親善の役に立てたのではないかと思います。この交換留学は、私にとってかけがえのないものとなりました。

最後に、この派遣事業を支えてくださった方々、そして、一緒に行った仲間達、本当にありがとうございました。

## ぐんま国際アカデミー 女子 7年

私は、ラファイエットに行き、たくさんの事を学んだと思います。私は、改めて自分の英語能力、そして、自分はアメリカで何を学んだか、この経験をこれから何に活用していけるか、そう考えました。

まず、ラファイエットの人たちは言いたいことをはっきり言っていることに感動しました。日本人の人たちは、言いたいことを我慢して、心に押し込めてしまうことが多いです。アメリカの人たちは私たちがなじめるように、教室に入った途端、みんな笑顔で宜しくなどと言ってくれました。時々目があったら変顔などもして、私達を笑わせてくれました。

そして、私はアメリカの人たちの温かさも知りました。私がいくらふざけても、ずっと笑顔で一緒に笑ってくれたり、私が初日に緊張していても、アイスクリームショップに連れていってくれたりし、私だったら迷惑に思ったりしてしまうことをラファイエットの人たちは、温かく受け入れてくれました。私は、朝が弱いのですが、必ず間に合って、でも、ちゃんと睡眠をとれるように私の寝る時間まで気にしてくれました。

そして、私はラファイエット、そして西ラファイエットの市役所に行き、日本とアメリカの建物の違いを知りました。

わたしはチームの良さ、安心できる場所を覚えました。税関の人が怖くて、落ち込んでいた

時、みんなは私を励まし、元気づけようとしてくれました。そして、久しぶりに会ったりしたら、とてもうれしくなりました。このようなことから、私は仲間の大切さも知りました。

私がアメリカに行って、学んだことはいっぱいあります。しかし、私が一番いいなと思った、学んだことはやはりアメリカの人たちの温かさです。アメリカの人にとって、当たり前かもしれない。しかし日本人たちにとってはあまり当たり前ではないです。日本のたいていの人は、もじもじして、自分らしさを出しません。なので、そこがいいなと思いました。

私は、アメリカに行って、失敗もいっぱいしましたが、それでも温かく迎え入れてくれた人たち、支えてくださった人たちに感謝します。また、機会があったら、みんなでラフィエットに行けたらいいなあと思っています。

## 市立太田高等学校 女子 2年

私が留学に応募した理由は自分の英語がどこまで通じるのか、相手の英語がどこまで聞き取れ、理解できるのかを試したいからだった。そして現地で友達を作って帰ってくる、というのを小さな目標としていた。

私は今回が初海外で飛行機も初めて乗るので、行く前は楽しみより不安の方が大きく、私が行って大丈夫なのかな…とっていた。中学三年のときにも応募して落ちてしまったので、全員が行けるわけではない、落ちた人もたくさんいる、ということもわかっていた。

だが行ってからの10日間は、緊張することなく逆になんであんな不安だったのだろうと思うくらいだった。

飛行機からおりたときはまだ実感はわいていなかったが、入国審査のときのネイティブな英語を聞いたとき、いよいよアメリカにきたのだなと思った。

そしてやっとホストファミリーと対面。空港からホストファミリーとの対面場所まではバスで、後ろの席に座っていたのでそのときは何も感じなかったがホストファミリーの車に乗って初めて運転席が左側、車道が右側ということに、わかっていたことでも違和感と驚きがあった。

また、私の一つ下のホストファミリーが車を運転していたことも衝撃だった。普通に考えてアメリカでは15歳から免許取得可能と知っていたが、実際に見ると改めて私もアメリカだったらもう運転できる歳なんだなと思った。

ホストファミリーは本当に優しく、あたたかく受け入れてくれ、私を本当の娘のように扱ってくれたので、気兼ねなく頼ったり、話すことができた。ある日、ポップコーンを買ってくれたときお金を払うと申し出たら、あなたたちは私の娘なんだからいいの。私に買わせて。と言われ、本当の家族のようで嬉しかった。

同じ家にホームステイをした子が携帯をなくしたとき、家族総出で色々なところを探してくれた。結局その子のスーツケースの中にあり、その子がすごく謝っていたときに、謝ることじゃないよ、見つかったんだからいいことだよ、謝らないで、と言われ、日本人はなかなか「謝らないで」と言えないけれど、そういう言葉がさっとでてくるアメリカ人のおおらかさを感じられた。

日本人のすぐ謝るところ、自分を卑下するところ、見た目を気にしすぎるころ、一人では行動できないところ、変な仲間意識、そういうところがアメリカにはなく、人に流されないでみんなが自分をもっているのがすごいなと思った。それとみんなが家族のことを大好きなのがいいところだなと思った。学校の授業中に先生の娘が入ってきたり、スーパーやモールに行ったときも家族で来ている人が多くいた。

逆に日本のよさを感じられる場面もたくさんあった。授業のはじめと終わりに挨拶をするところ、人にきちんとお礼が言えるところ、人に気遣いができるところ、当たり前のことだと思っていたこと、当たり前をやっていたことが、日本のよさだったのだなとアメリカに行き気づくことができた。

はじめに述べた通り、私は自分の英語力を試したいと思って留学の応募をした。私の英語は伝わるかという不安もあったが案外文法がなくても伝わるものだなと思った。文法などを気にするよりも、伝えようとする気持ちとどれだけ自分がその人と話したいかが重要なんだとわかった。

そして、現地の人と友達になりたい、という目標は充分すぎるくらいに叶えることができた。ホストファミリーの娘が同世代だったこともあり、すごく仲良くなれ、今でもずっと連絡を取り合っている。それと学校で私たちを案内してくれた子やその友達とも連絡を取り合っている。今だけでなく、これからもずっと連絡を取り合っていきたい。

高校2年生の夏休み、事実上高校生最後の夏休みになかなかできない体験ができてよかった。この10日間は間違いなく充実していた。この留学をこれからの人生に活かしていきたい。

## 太田女子高等学校 2年

今回、私は初めてに等しい海外でした。第1回の研修ではメンバーとの初対面で緊張・不安しかありませんでした。ですがその後5回の研修会や、余興の練習を通してアメリカに行く時にはメンバー間での不安は無くなり出発前の15日にはとても安心していました。しかし、やはり当日になると緊張していました。約13時間のフライトを終え、シカゴ空港に着き、税関で初めてネイティブなアメリカ人と会話をしました。本場の会話は日本の授業で行われる会話とは比べ物にならないくらい早く、なんとか聞き取れた感じで、この時点ですでに不安が再発してしまい、その後言葉の早さに慣れるのに3日間かかりました。ホストファミリーに会う前に日本にもあるマックに寄って昼食をとりました。私はナゲットを頼みましたが、日本の倍の量があって驚きました。それがまず私が衝撃を受けたことです。夕方、**public library**でホストファミリーと合流しました。対面した時のホストマザーの印象は、キャリアウーマンで、きりっとした感じでしたが話すとても気さくな方で自分達を心から迎えてくれていることがすごく伝わりました。対面後、ホストマザーの仕事場にお邪魔して会社の方を紹介してもらい、その後ホストマザーが会議だったので会社の方にモールとチョコレートショップに連れてっていただいたのですが、チョコレートショップではチョコレート作りを体験させていただきました。その後ホストマザーと合流し、家についてしばらくした後ホストファミリーと対面しました。ホストファミリーみんな笑顔で優しく迎えてくれ、無事に一日目をすごせました。

二日目は動物園、市役所、西ラフィエット市役所、警察署に連れてって頂きました。市役所で市の旗の話や市のところどころに置いてある動物のオブジェなどの話を聞き、さらに警察署ではこの研修に参加しないと到底できないような体験をさせていただきました。その後、市街地の周辺を散策し、街中の文化の違いを肌で感じられました。

三日目、市議会では地域の話、裁判所では裁判員制度などについての話をさせていただきました。お昼にはアメリカの飲み物「**Dr.pepper**」を飲んだのですが私の口にはあわなかったのですが、それも印象に残っています。次の日は牧場を見学しました。ここの牧場は日本のようにただ動物がいるだけでなく綱渡りやアメリカの農業の説明を踏まえたゲームなど日本とはまた違った面

白さがある場所でした。待ちに待った週末のファミリーデーの1日目は自分や周りのお土産を買いに行かせてもらい、夜は結婚式に、2日目は湖で自家用ジェットととても貴重な経験ができ、さらにホストファミリーとの距離が近づいたような気がしました。最後の3日間が一番不安だった地元の高校に通わせていただいたのですが、日本の高校と全く雰囲気や制度が違っていても新鮮でした。バディや生徒、先生まで気さくに話しかけてくださり充実した3日間をすごせました。制度の違いを詳しくすると、授業は日本でいう大学のような制度だったり、授業時間はバラバラだったり、授業中の飲食OKだったりと多くの場面で文化の違いを感じました。さらに、私達はホストファミリーとお寿司を作ったり、書道をしたりと日本の文化と一緒にして日本の文化の良さも感じてもらえたと思います。今回の経験を通して今までの自分とは違った価値観を持つようになり、さらにこれからの人生の糧になる経験ができました。

### 市立太田高等学校 女子 1年

私は今回、この企画でアメリカに行くことができ、心から良かったと思っています。10日という短い時間でしたが、とても充実した日々を送ることができました。

アメリカに到着して、まず最初に驚いたことは、どの車でもハンドルが左だということでした。とても小さい日本との違いだけけれど、とても衝撃的でした。またそれと同時に、これから経験するさまざまなことに大きな期待を抱きました。アメリカで最初に食事をしたのはマクドナルドでした。そこで、初めて英語で注文をしました。整った英語ではなく、単語だけでの注文になってしまったのですが、自分の食べたいものをしっかり伝えることができ、大きな達成感を味わえましたが、一方で自分の英語力がとても低いことを実感させられ、悔しかったです。注文したのは日本にはないようなものでした。アメリカのもののほうが大きく、その大きさに圧倒させられました。その後、ホストファミリーと対面しました。どんな人なのかまったくわからず、不安と期待でドキドキしていました。私のホストファミリーは6人家族でした。私と同年の女の子がいたので、家でたくさん話しかけてくれました。しかし私は何を言っているのか少ししか聞き取れなかったし、話すことがまったくできなかつたので、うまく会話はできませんでした。ホストファミリーはとても親切でした。私達に伝えることがあるときは、必ず最後に分かったかを確認してくださいました。そして、分からないというと、ジェスチャーをたくさんして、私たちが理解できるまで伝えてくださいました。ファミリーデーにはさまざまな場所に連れて行ってくださいました。インディアナポリスにある従姉妹の家に行き、その後アメリカンフットボールを見ました。今までアメフトは見たことがなく、ルールをまったく知りませんでした。会場に入るときに手荷物は持ち込めず、財布などしか持ち込めませんでした。入場口にはゲートがあり、危険物のチェックをしていました。アメリカでおきているテロ対策のひとつなのだと思います、ここにも日本との違いを感じました。会場はとても広く、6万人収容できるスタジアムでした。開会式の国歌斉唱のときに、私は今回アメリカに来られたことが本当に嬉しく、今こうしていることが信じられず、感動で泣いてしまいました。次の日はファミリーと一緒に教会に行きました。教会では賛美歌を歌ったりしていました。教会にいる全員が一人の神を信じているというのは私にとってはとても新鮮でした。宗教というものがいかに生活に浸透しているか、一緒に生活することで身をもって感じました。今回、全員で行ったところで一番記憶に残っているのは、西ラフィエット市です。市長の前でスピーチをしたのは緊張しましたが、会話らしいことがはじめてできたので大きな達成感を味わえました。警察署では、車やバイクに乗せてもらったり、手錠をしてもら

など、貴重な経験ができました。牧場に行ったり、裁判所に行ったり、どれも普段は体験することのできないものでした。

今回の経験を通して、私は新たな視点で物事を見ることができるようになりました。今まではひとつの物事に対して、自分の考えを持ったらもうその考えを変えることは考えていなかったけれど、自分の考え方を相手にしっかりと伝え、相手の考えを聞いて自分の考えに反映するアメリカ人と関わることができたことで、相手の考え方を認めることの大切さを感じました。この経験を生かして、これからの自分をさらに成長させていきたいです。

## 前橋高等学校 男子 2年

まず、今回の交換学生派遣事業に参加できたことを光栄に思う。僕が高校生になったとき、高校生のうちに海外へ行って異文化に触れることを目標の一つとしていたから、それがこういう形で達成できて本当にうれしい。

僕が今回この事業に応募した最大の理由は、自分の夢を見つけるためだった。僕はまだ自分の将来の夢を見つけられていなかった。自分の進みたい道がわからないから、行きたい大学も、その学科も決められなかった。周りの友達が将来に向かって駆け出しているのに自分は停滞してしまっている。一種の焦りがあった。そんな時に、通っていた英会話の先生から今回の話を聞いた。もしアメリカに行けたならそれはとても貴重な経験となる。人として成長することもできるのではないか。将来の夢まではいかないにしろ、近い未来、自分がやりたいことくらいは見つかるのではないか。だから僕が行けると決まったときにはこの研修をただの旅行で終わらせてはいけないと気を引き締めたものだった。

そしてアメリカに行ってきた。個人的には銃社会とはどんなものなのだろうという不安もあったが、僕を含め皆無事に帰国した。僕はそれまで海外へ行ったことはなかったので、異文化体験がどんなものか漠然としか頭になかったし、そもそも英語が通じるのかが不安だった。その不安は税関審査の時に予想通りの中した。税関の話すナチュラルなスピード、ナチュラルな発音に太刀打ちできず、後ろの人の助けを乞うて何とか通過したという感じだった。でも、英語の壁にぶち当たったのはそれが最初で最後だった。ホストファミリーを含め、現地の方々はその拙い英語を聞いて、自分が言いたかったことを推測し、確認してくれた。また、彼らは僕が英語を聞き取れなかったとき、ゆっくり、はっきりとした発音で話してくれた。相手が理解しようとしているから、自分からもジェスチャーを交えてできるだけ言いたいことを言おうと努力した。言葉がうまく伝わらなくても、会話はできるだけした。「自分は太田市の、ひいては日本の親善大使だ。僕がアメリカの文化や生活のことを吸収する代わりに僕からも日本の文化や習慣を紹介しよう」と思い、日本の高校の風景や、今話題になっていることなどを話した。

僕のホストファミリーのクリスさん一家は、僕を温かく迎えてくれて、僕がアメリカでの生活に困らないようにいろいろと気にかけてくれた。「アメリカではとてもポピュラーな食べ物だよ」と言って、日本では食べられないようなおいしいものをたくさん食べさせてくれたし、僕が「〇〇へ行きたい」といえばそこへ連れて行ってくれた。パソコンを自由に使わせてくれたりもした。

こうしたホストファミリーのお気遣いや、仲間の支えもあって、僕は大きなカルチャーショックも受けずに日本に帰国してきた。アメリカは、すべてが新鮮だった。スーパーマーケットやバス、トイレさえも僕には新しいものに見え写真を撮っていた。なるほど生まれて幾月かの赤ちゃんに戻ったようで、とても充実した日々を送れた。

冒頭でも述べたように、今回の研修の、僕の最大の目的は夢を見つけることである。夢は見つかった。いつかもう一度アメリカに行って、アメリカで職を見つけ、定住したい。今はまだ馬鹿げた夢である。だけど、将来は絶対にその夢を叶えたい。もっと勉強に、英語に力を入れる必要があるなど痛感した。4年後には東京でオリンピックが開かれる。そこで語学ボランティアとして世界に貢献したい。そんな中期的な目標もできた。

この10日間は本当に短く、この上なく充実していた。分量の関係で他は割愛する。

最後に、僕を温かく迎えてくださったホストファミリーのお二人、現地で僕たちに協力してくださった方々、団長・副団長と一緒にアメリカに行った仲間のみんなに心から感謝申し上げます。短い間だったけど、本当にありがとうございました。

## 市立太田高等学校 男子 2年

今回太田市の姉妹都市であるアメリカインディアナ州グレイターラファイエットに太田市のPR大使、また交換学生として10日間滞在した。

私にとって今回は初めての海外であった事もあり、この事業の面接審査から合格発表、5回の研修会、そして機内までずっと興奮と楽しみでいっぱいだった。しかし、アメリカでの入国審査で早くも英語で相手に表現することの難しさを痛感した。学校の英語の先生が私達日本人の生徒のために聞き取りやすくするような英語やテストで流れるリスニングなどで聞く英語と違い、ネイティブで独特な英語を聞き取るのはとても難しく、苦労した。初日はその後にホストファミリーと対面してそのまま帰宅という流れだった。家に向かう車の中では、初めて見るラファイエットの街並みやホストファミリーのことについて色々質問したり、たくさん会話をした。そしてホストファミリーの家に着くとまず家の様子にとっても驚いた。庭にプール、地下にビリヤード台があったり、庭の敷地面積がサッカーコート2面分位あること。また後々知ったことで、私が公共の湖だと思っていたものが実はS I Aのお偉いさんの私有地であることをホストファミリーから聞き、その他にも道路であるなど、10日間ずっと日本とは比べ物にならないアメリカの土地の広さに驚かされっぱなしだった。ホストファミリーは日本に2年ごとには来ていて、とても優しく私をもてなしてくれた。私が話した英語に変な所があったら指摘してくれたり、料理や掃除を一緒にしたり、私の買い物に付き合ってくれたりと家族のように接してくれたおかげで、ホームシックになることなくホストファミリーと楽しい時間を過ごすことができた。一番楽しかった時間は、家族みんなで毎日プールに入りながらDVDを見たり、フリスビーやバーベキューをしたり、その日の出来事を話したりしたことだ。

2日目から4日目までは市内のいたる所を観光、訪問した。ラファイエット市と西ラファイエット市の二人の市長に挨拶にいった。どちらもとても気さくな方々で、日本にも何度も来たことがあり、リラックスしてお話をすることができた。お話の中でも市が進めている政策で、子供や学生がデザインした像や壁の絵が市役所をはじめ動物園や裁判所、大通りなど至る所にあって、とてもユニークに感じた。

二つの市の警察署訪問では、パトカーやバイクなどに乗せてもらったりして、とても貴重な体験をさせてもらった。地域の行政などを評議する場所の訪問では、食事をとりながら議論をするというアメリカならではの習慣を体験し、日本にもそういったものがほしいと思った。S I Aの工場見学でスバルの車を作る過程を見学する中で、いつでも数字と時間が意識させられる非常にシビアな世界であることを知って驚いた。その他、パデュー空港の管制塔に入らせてもらったり、

地元の人に古くから愛されるピザ屋さんや有名な農場で色々な事を体験したりと充実していた。

7日目から9日目は地元の高校で体験授業をした。学校の先生や生徒に歓迎してもらい、アメリカの授業を受けることができた。日本とは違う授業スタイルや施設、学校の誇りなど様々な新しい事を発見することができた。

9日目のお別れパーティーではホストファミリーや現地での引率の方に練習した余興を披露して楽しんでもらい、スピーチではみんなが泣いてしまうなど、この10日間はとても充実し、楽しいものだった。

この研修で目標としていた英語を使って表現したり聞き取ったりすることはできたが、まだまだ力不足な所もあり努力しなくてはならないと分かった。そんな面も含め、今回初めてこういった体験ができてとてもよかった。ここでの新しい発見を自分の留学や進学、職業など将来の夢に繋げていきたい。

### ぐんま国際アカデミー 女子 11年

海外に行くのはやはり楽しい。私は出発日までワクワクしながら待ち遠しくて仕方がなかった。どんな世界が待っているだろうと胸を膨らませていた。海外は私にとって社会的にも国際的にも勉強になる最高の場所である。将来、海外に長期留学したい私はこの交換学生派遣事業は非常に良い機会だった。私はこの交換学生派遣事業を通して自分の英語力を向上させたいという目標があった。自分から話しかけて流暢なコミュニケーションをとるという思いで行った。行きの飛行機ではずっと爆睡だった。食事以外はほぼ寝ていた。ただ、着陸前に窓を見てみたらアメリカの壮大な大地が広がっていた。この小さい窓からの景色は非常に圧倒的だったため鮮明に覚えている。

そして飛行機を出ると英語が飛び交っていた。ついにきたのだなと実感した。

もう私達は外国人なのだと思議な感覚だった。

そしてこの10日間でラフィエットの良い面にたくさん触れることができた。

まず、ラフィエットは市民も一緒になってより良い町づくりをしていると感じた。学生がこの町の旗のデザインをしたり、子供達がこの町のシンボルとなる動物の像を作ったりと若い人たちも参加していると知り、正直驚いた。旗のデザインも色に意味を込め、こういう町になって欲しい、またはラフィエットはこういう町であるという思いを入れ、町のシンボルとして作ったそうだ。町を詳しく知ることは、町の発展にも繋がる可能性があるのだと気付かされた部分であった。また、エコな町作りをしているのは一目瞭然だった。捨てられたペットボトルやワイヤーなどを再利用しオブジェを作っていた。私達が訪問した動物園であったり街中の中だったり様々な場所で多く見かけた。さらに川の中に落ちているゴミを拾ってオブジェや絵など様々なアートを作って売っているショップもあった。斬新な物が多くとても興味深かった。

面白いと思った所は裁判員制度についてだ。ラフィエットは日本とは違い、重い判決の時も一般市民である裁判員も参加するそうだ。ただ、裁判の制度は日本と同じく三審制だそうだ。このような違いを見つけるのが楽しかった。

一番ユニークだなと思った違いはスーパーマーケットで見つけた。会計後にレシートは渡されるのは日本と同じだった。ただ渡された後におめでとう、〇〇ドルセーブできました！と言われた。日本にはないこの言葉はとてもインパクトがあった。アメリカの節約文化的なものを感じた。たくさんの食べ物を買う分安く済ませたいという人が多いと考えた。みなれない言葉、光景が強

く印象に残った。

最後に私は日本に帰国して長い時がたった今もラフィエットの旅の余韻に浸っている。写真を何度も見ながら楽しすぎた時間のことを考えている。たくさんの現地の友達ができとても充実した日々だった。意外にも日本について興味を持ってきている生徒や先生が多く、積極的に話かけてくれ、日本についてたくさん質問してきてくれた。来るのを楽しみにしていたよ、という言葉が一番嬉しかった。たくさんの方が歓迎してくれとても貴重な体験ができた。私の一番の利益は現地の友達ができたことだろう。LINE や Instagram など英語でコミュニケーションができとても勉強になる。

上半身裸で走っている男性や黄色のスクールバスの行列など日本では見慣れない光景が多く、一つ一つの出来事、光景が新鮮で楽しい旅だった。目標である流暢な英語でコミュニケーションが少しは達成できたと思う。ただ一方で自分の英語力のなさを痛感し、もっと英語を磨きたいと思った。

たくさんの出会い、たくさんの経験ができ、夢のような10日間だった。